

持続的な地域活性化事業について

～高知県・梼原町松原地区を対象として～

1200407 氏師 千穂

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

高知県高岡郡梼原町松原区は、2019年時点で高齢化率が63.9%と超高齢化社会でとなっており、いわゆる「限界集落」と位置付けられている。よって、現状のままでは近い将来消滅する危険性があるため、地区の存続を図る目的で地域活性化の取り組みが必要である。研究対象の梼原町松原区は国有林野事業が展開されてきた背景から貴重な森林資源が多く残された地域である。この森林資源を活かし、セラピーロード事業として整備し、2006年に「久保谷森林セラピーロード」として認定された。しかし、松原区の高齢化のさらなる進行により観光地としての持続的な広報や維持管理が困難になるとともに、後継者問題が深刻化し観光地として今後の展開を早急に策定する必要がある。

そこで、本研究では、松原地区に位置する久保谷森林セラピーロードを核とした地域活性化事業が抱えている課題を明確化し、持続的な改善案を提示した。その結果、久保谷森林セラピーロードの現状の問題点として、事業を行っている者同士で統一した観光戦略が存在しないこと、地域の住民同士、行政の協力が足りないことがあげられた。この課題の解決には、行政と松原地区双方が一致した観光戦略を明確化させること、維持管理を行っている組織が経営的に自立できる仕組みを作り上げることが必要である。

2. 背景

現在、日本の各地において高度に発展された産業経済、情報社会が到来しており、人々は常にストレスに侵される環境下に置かれている。人々は自らの生活を見つめなおし、暮らしの中に「癒し」を求めている。近年、「癒し」を提供して

くれる場所として森林や温泉、動植物といった「自然物」を利用した医療行為（「療法」「セラピー」）を行う事例が注目されている。久保谷森林セラピーロードが位置する高知県梼原町は「環境モデル都市」として、森、水、風、光などの自然エネルギーを活かした取り組みを積極的に行っている。しかし、梼原町は中山間地域に位置し、少子高齢化問題が急速に進行しているため、地域の衰退が深刻化しており、地域活性化の取り組みを必要としている。

本研究の対象である高知県梼原町松原地区では、梼原町役場から南南東約10kmの典型的な中山間地域である。当地域では、森林セラピーロードを核とした地域活性化の取り組みを行っている。毎年、年に2回、新緑の時期と紅葉の時期に久保谷森林セラピーロードを利用したイベント「セラピー祭り」を開催している。セラピー祭りの際、松原地区には梼原町内外から観光客が訪れており、ある程度の認知されていることが伺える。しかし、先行研究(2015.森林セラピーロードをコアとした地域づくりの現状と課題に関する研究)において人手不足や維持管理についてなどの問題点が挙げられていたが、現時点で解決はされておらず、地域の衰退は深刻化が進むばかりである。

そこで、本研究は森林セラピーロードを核とした地域活性化事業をいかに持続的に行えるかということに着目した。観光地として魅力を高め、観光客が増加することで観光産業が活性化することは、地域経済にとってプラスになるだけでなく、地域住民にとっても、来訪者との交流や地域貢献が生活の質にプラスの効果を実現すと期待している。

3. 目的

久保谷森林セラピーロードを対象として、これまでのセラピーロード事業が持続的でない原因を明らかにし、事業関係者と地域住民、その地域の行政の働きによる森林セラピーロードを核とした持続的な地域活性化事業を提案する。

4. 研究手順

本研究は、はじめに、先行研究の調査を行い、久保谷森林セラピーロードの問題点について整理する。次に、現在の久保谷森林セラピーロードについて現状について整理し、課題を抽出する。その後、久保谷森林セラピーロードを管理する事業者と他の地域で森林セラピーロードを行う関係者にヒアリング調査と現地調査を行い、比較分析する。最後に、久保谷森林セラピーロードを核とした事業を持続的に行うための改善案件を提示する。

5. 梶原町松原区の概要

高知県梶原町は高知市の西へ約80kmの中山間地域に位置している(図1)。梶原町は、四万川、越知面、西区、東区、初瀬、松原地区の6区から形成されている。町面積の91%を森林が占めており、カルスト地形になっている。梶原町の地域的な特徴として北部地域(四万川・越知面・西・東の4区)は梶原川の盆地に位置し、比較的役場周辺に商店街など多数分布しており、交通面や買い物などの生活の利便性が高い。その反面、南部地域(初瀬・松原の2区)は全体的に道路も狭く町の中心地からも離れているため、中心部へ移動するためには整備が整っていない山道を40~50分かかけなければならない(図2)。森林セラピーロードがある松原地区は、南部地域に属している。松原地区は人口が約260人の高齢化率が63.9%(2019年時点)で限界集落とされている。梶原町内で最も高齢化率が高く、町開発があまり進んでいない。観光資源として久保谷森林セラピーロード、どぶろく、お大師様公園、八百とどろろがあげられる。



(図1) 梶原町地図

(http://www.jcp.or.jp/akahata/aik11/2011-04-11/2011041113_01_0c.jpg) (最終閲覧日: 2019年11月25日)



(図2) 梶原町6区の地図・位置関係

(<http://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2017/03/14/a1180490.pdf>)

6. 久保谷森林セラピーロードの概要

●久保谷森林セラピーロードについて

梶原町役場からのセラピーロードに適した土地はないかという呼びかけがきっかけで始まり、2007年3月に森林セラピーロードに認定された。農業用水路に沿って緩やかな道が続いている。旧営林署管轄の国有林を利用しており、全長は3kmである(写真1)。まろうど会が主に維持管理やガイドの受付窓口を行っている。セラピーロードの周辺施設は宿泊施設が2軒

あり、飲食店が2軒ある。宿泊施設はどちらも一軒家タイプであり、1日に宿泊できる人数が1組と限られている。



(写真1)久保谷森林セラピーの道中

●まろうど会について

まろうど会は2007年に久保谷地域で昔使われていた用水路の脇の小道がセラピー基地認定を受けたことがきっかけで、当時松原区長を務めていた下元廣幸氏を中心に平成21年に結成された。松原地区に訪れる客人(まろうど)をもてなす活動を行っている。そのため、セラピーロード関係だけではなく、地域のイベントにも中心となって活動している。現在、会員は約30人近く存在しており、その中でセラピーガイドの認定者は8人である。

まろうど会は非営利団体で、ほとんどの活動をボランティアとして活動している。会員は他にメインでの仕事を持ちながら自分の可能な範囲で活動に参加している。そして、会員のほとんどが60.70代の高齢者で、組織自体を引き継ぎ活動していく後継者の不足が問題になっている。

7. 松原(久保谷森林セラピーロード)の現状と課題

●セラピーロードの現状

まろうど会がメインでセラピーロードの維持管理・ガイド案内を行っている。受付は電話対応のみとなっており、24時間対応することはできない。まろうど会だけの資金では全ての活動は賄うことができないため、高知県森と緑の会に助成申請をして、セラピーロードの修繕作業などを行っている。ガイドをする際、団体の人数に応じてガイドをつけている。ガイ

ドは1人であることが多い。ガイド料は1人千円でその内の8%をまろうど会の収益とし、残りを案内人に配分している。2018年には年間345人の観光客が森林セラピーロードを訪れている(ガイド有、イベント時)。年2回の「セラピー祭り」と年1回「医師と歩くセラピーロード」という森林セラピーロードを利用したイベントが毎年行われている。医師と歩くセラピーロードは人数を限定しているが、他のイベント時の観光客数は徐々に増えている。ガイドを行うものは森林セラピーガイドの資格を保有していなければならないが、この資格は森林セラピーソサエティに認定されたものである。ガイドを行う者は育成される場所があるわけではなく、認定希望者は個人で勉強を行い、資格を取得する。現在、まろうど会で希望者の募集は行っておらず、会に所属している人が知り合いで興味がある人がいないか探し、声をかけるといって案内人を増やしている。

梶原町の行政支援としては物品提供やガイド認定の受験料の全額負担などを行っているが、実際現地に赴いて視察を行うこともせず、企画会議においても担当者が来ないという事態も起きたため、地域住民の中には押し付けられたと感じている人が少なからず存在している。

現地調査やヒアリングを通して明らかになった松原(久保谷森林セラピーロード)の課題は以下のとおりである。

(1) 観光客数を正確に把握できていない

観光客数の増減は地域活性化事業を今後行っていく中でも重要な指標となる。しかし、久保谷森林セラピーロードにおいて観光客数の正確な集計がとられていない。久保谷森林セラピーロードは常時開放しており、気軽に誰でも散策することができる。ツアー時やガイドを有した人数やイベント時に訪れた人数のみの把握しかできず自由に訪れた人数を知ることができていない。

(2) 人手不足・後継者不足

松原地区は高齢化が進んでおり、住民の中には地域活性化をさせることに興味がなく、今の生活に不便は感じていても不満を感じていない人がいる。そのため、地域住民から

協力がなされていない。また、まろうど会は「自分の可能な範囲での活動を」ということを掲げているため、維持管理に人が集まらない。常に人手不足な状況にある。まろうど会は現まろうど会の会員が知り合いに声を掛け、人数を集めているため知り合いに若者がいなければ集まるのも高齢者が多くなる。

(3) 観光客に関する情報不足、広報手段の閉鎖性

高齢化によりインターネットの利用ができないものがほとんどであり、近年のネット社会においてネット活動ができていない。そのため、窓口の受付は電話のみの対応となっている。松原地区について観光案内のホームページが存在してはいるが、久保谷森林セラピーロードメインの記事が上がったことはなく、近いうちに閉鎖する可能性が高い。セラピーロードを活用したイベント情報は、梶原町民に対しては町の広報誌や町内一斉放送で情報を得ることができるが、町外の参加希望者は個人が運営しているサイトを閲覧するか、個人が開設しているインスタグラムや Facebook、さらには新聞記事を閲覧するしか方法はない。このように、観光客はセラピーロードを活用したイベント情報を知る手段が非常に限られ、この近年の情報化社会において情報量の少なさに戸惑っている。さらに、個人が運営しているサイトも来年にはやめる予定とのことである。

よって、町外の人を観光客として誘致するのはあまりにも不可能で閉鎖的だと断言できる。観光は地産地消ならぬ地産外消であるべきである。

(4) 梶原町役場との連携の欠如

久保谷森林セラピーロードについて行政側との統一された観光戦略がないことが伺えた。今後の動きが定まらないため、今何をすべきかがわからないようだ。協力体制や運営時の役割分担はまろうど会と松原区の一部の住民だけで行われており、梶原町役場は一切の介入を行っていない。梶原町役場のサイトに久保谷森林セラピーロードについての質問を問い合わせても「まろうど会を案内します。」との返答だった。

8. 篠栗セラピーロードの実施事例分析

久保谷森林セラピーロードの各問題点を改善していく上で、比較的知名度の高い他の森林セラピーロードの事例を検討することで、改善点を模索していく。

8.1 篠栗セラピーロードの概要

篠栗セラピーロードは2009年3月に森林セラピーロード基地認定を受けた。福岡都市圏から自動車でも30分ほどの距離にあり、アクセスは良好である(図3)。この事業を始めたきっかけは元々篠栗には四国霊場遍路があり、その遍路道の有効活用を行い、人々に「歴史と自然」を感じてもらうためである。この事業をまちづくりの柱としており、6本ほどコースが存在している。

篠栗セラピーロードでは案内の窓口や案内人の育成は行政が行い、観光については観光協会が主体となって行っている。受付は主に運営サイトで行うが、土日祝は役場がお休みのため返答できない。篠栗では「森の風・篠栗」が森の案内人を行っている。会の設立は2011年で行政が呼び掛けてできた会である。会員数は33人(令和元年9月時点)である。案内人は年に4回の無料の講座(行政主催)を受けることで資格を取得することができる。周辺施設は多様に存在しており宿泊施設も遍路宿が10数軒ある。



(図3 篠栗の位置関係)

(<https://map-it.azurewebsites.net>) (最終閲覧日:2019年12月1日)

8.2 現地調査の概要

(1) 現地視察

①目的：セラピーロードを核とした事業やイベントの内容と関係者の動向や案内の仕方、手法論について調査するため。

②日時・内容：2019年10月29日。実際にコースの一つである「篠栗九大の森コース」を案内してもらい体験した。

(2) ヒアリング調査

①目的；篠栗セラピーロードの現状を知り、成功要因に関する基礎資料を収集する。

②日時：2019年10月30日

③対象：篠栗セラピーロード案内人の柿木さん、篠栗町役場担当者合屋さん

④項目：事業のきっかけ、参加したきっかけ、頻度、課題に感じる点、今後の展開、事業が始まり町はどのようになったと感じるかなど

8.3 現地調査結果

久保谷森林セラピーロードでは見られなかった篠栗セラピーロードの取り組みが見受けられた。

●セラピー弁当

篠栗セラピーロードでは五感をひらき、自然で癒しを感じてもらうために予約制ではあるが、セラピー弁当を提供している。地域の4店舗の仕出し屋に協力してもらい、竹皮と地産のものを使うことを絶対条件としている。

●町民の健康促進活動への協力

町民への健康促進のため通常より低価格でツアーを企画したり、メンタルヘルス対策として団体や企業研修の受け入れをしたりしている。

●地域の小中学生の地域学習への利用

地域学習の一環として森林セラピーロードを利用している。森林セラピーロードの道中には100m間隔の所に案内板を設置しており、地域の小学生たちが作成したものとなっている(写真2)。

●体験型ツアーの存在

案内の中にセラピーロードの植物を利用したしおり作りが体験でき、中間地点ではコーヒーと地域の煎餅屋の煎餅を頂く休憩時間を設け、ただ散策するだけではない時間の提供を行っていた。また、樹木の匂いを実際嗅ぐ、セラピーロードを歩く前にはしっかりと準備体操を行うなど、参加者が自分たち自身でセラピーロードのものに触れる時間があつた(写真3)。

●手すりなどの安全器具

篠栗セラピーロードは平坦な道ということもあるが、道中に手すりの設置、セラピーロードの入り口と出入りに杖の自由貸し出しを行っていた。全体的に安全に配慮した構成となっていた(写真4)(写真5)。



(写真2 距離案内板)



(写真3 自分で作成できるしおり)



(写真4 入口に設置された杖)



(写真5 篠栗セラピーロードの道中)

●その他

その他にも入口と出口に登山者カウンターを設置し入林者数計測を行っており、正確な観光客数の数値を出している(写真6)。

また、福岡県内には篠栗セラピーロードを含め4つの認定を受けた森林セラピー基地が存在し密に連携を取り合っている。年6回担当者会議、年1回案内人ネットワーク会議(勉強会)、担当者のみ博多、天神でのPR活動があげられる。2019年度より4つの基地でのスタンプラリーを開始するなど新しいことに挑戦している。



(写真6 登山者カウンター)

●篠栗セラピーロードの課題

ヒアリング調査の結果、篠栗では①癒しと観光のバランスを測りニーズに対応していくこと、②案内人の養成講座の回数を増やすこと、③案内人会の自立が課題として挙げられ後継者問題は今現在生じていないことが分かった。

●篠栗の今後の展開

篠栗セラピーロードでは新たに①体験型メニューを取り入れた事業の推進、②宿泊客増加に向けた観光協会とのさらなる連携、③医療機関との連携を行い、地域の健康づくりや今行っているイベントを継続的にやっていく方針である。

9. 篠栗セラピーロードの成功要因と久保谷森林セラピーロードとの比較分析

●運営資金

篠栗セラピーロードの運営費は町役場からの補助金が年間30万円とガイド料で賄っている。このうちガイド料は、案内人を2人つけている関係上、メインの案内人とサブの案内人で3:2の割合で配分している。4人以上の時は上記配分の残りの金額を煎餅代、保険料、携行品、スキルアップ研修等の運営資金に充てている。

これに対し、久保谷森林セラピーロードはまろうど会からの補助金とガイド収入による。修繕作業には高知県森と緑の会事業に応募して運営資金の一部に充てている。ガイド料の8%をまろうど会の収益とし、残りの金額を案内人に

配分している。そのため、ガイドではほとんどの利益をまろうど会としては得ることができず、維持管理や修繕を独立して行えない原因にもなっている。

	久保谷	篠栗
ガイド料	1人1000円	4名以上1人1500円 3名以上1組5000円

●年間のイベント数

篠栗では案内人が各コースで担当を受け持ち企画運営を行う。企画内容は以下の3項目であり、毎月1回開催している。

- ・森林セラピー登山
- ・ノルディックウォーキング
- ・森林セラピートレッキング

その他にも不定期開催として、ヨガセラピーや森林散策とクラフト体験も行っている。町民のためのイベントを行うなどし、地域とセラピーロードとの間に繋がりを形成している。イベントを定期的に行うことで多様なニーズに合わせて集客を図っていることが確認できた。

これに対し、久保谷森林セラピーロードでは年に3回しかイベントが行われておらず、地域住民との関係性があまり高いとは言えない状況にある。

●セラピー関係の資格について

久保谷森林セラピーロードも篠栗セラピーロードも資格を習得した人だけが案内人になることができる。

久保谷森林セラピーロードで採用している資格は「森林セラピーソサイエティのガイド認定」である。このガイド認定は「森林セラピーガイド」と「森林セラピスト」の2種類である。どちらかの資格を有していることを条件としている。『森林セラピーガイド』は「森林を訪れる利用者に対して、森林浴効果が上がるような散策や運動を現地で案内する者」で、『森林セラピスト』は「森林を訪れる利用者に応じて適切なプログラムを提供し、効果的なセラピー活動を指導する者」である。この資格を取得するためには通信教育課程を受けなければならない。最低でも4万円以上の受験

料がかかる。久保谷森林セラピーロードでは行政が費用の全額負担を行っているが、案内人には誰でもなれる訳ではなく、毎年行政側から人数の制限をかけられる。2019年度は2人許可が下りた。

篠栗セラピーロードではこの高額な受験料を負担することせず、篠栗独自の資格にしている。この独自の資格は案内人のサブになることができる。興味のある人やスキルアップを目指す人が各自で森林ソサイエティの資格を取得する流れである。独自の資格は町主催の養成講座の全工程を終了した時点で取得することができる。この独自性が資金を圧迫させることなく、気軽に興味を持たせ、後継者の輩出への成功要因だと考える。

●案内人の育成

篠栗セラピーロードではスキルアップ研修や普通救命講習を年に1回行っている。スキルアップ研修では案内人の年齢に合わせて写真講座、コミュニケーション講座を開催している。

それに比べ、久保谷森林セラピーロードでは案内人の育成を行う場を設けていない。そのため案内人によって大きく案内の仕方や時間が変わる。

●PR・広報活動

篠栗では観光協会が主体となり広報活動を行っている。独自のホームページも逐一更新されている。役場のホームページはもちろんのこと、地域おこし協力隊がインスタグラムやFacebookを開設しているなど若者に向けても広報活動を行っている。観光産業において、いつでも新しい情報を手に入れられるということはとても重要な武器になる。

10. 久保谷森林セラピーロード活性の改善策提案

9章で示した比較分析より、久保谷森林セラピーロードを核として地域活性化を行っていくための施策を以下の通りに提案する。

①セラピーロードに関する今後の方向性の確定

セラピーロードの方向性の確定は梶原町の地域活性化戦

略を策定していく上で最優先事項であると考えている。このためには、セラピーロードを町の観光戦略にどのように位置づけていくか、後継者育成と雇用の関係性、広報戦略、維持管理方針などの地域活動戦略を、行政と現在の運営団体であるまろうど会との間で決めていくべきである。松原地区は役場がある中心部より離れているため行政と松原間での会議することが少ないことが課題としてあげられるが、より細やかな情報共有が必要とされている。宿泊地や休憩所設備など周辺施設を増やすには費用も膨大にかかるため、梶原町の地区同士の観光事業(ジビエ、チムジルバン、雲の上温泉など)と複合させ町全体の取り組みにしていくことでお互いの欠点を補えると考ええる。

②独自の資格に変え、気軽に案内人になれるよう促す

高額な費用を行政が負担しているため、人数を制限され案内人になれず人手不足になっている状況が現状である。久保谷森林セラピーロードのみに適応した資格に変えることで費用を抑え、気軽に案内人になれる仕組みを作ることによって人不足の解消を促す。

③セラピーロードの維持管理に関する跡継ぎ不足

梶原には梶原学園という教育機関があり地域活性化について学習している。セラピーロードについて教える場を積極的に作り、セラピー体験や修繕などを手伝ってもらうことで維持管理に関しての跡継ぎの育成になると考える。

また、高齢化を理由に行われていないネットでの広報活動を学生に代わりに行ってもらい、情報提供の場を広げることができる。

④定期的に講習会を開く

サービス向上のためにある一定の統一されたセラピー案内を行うべきである。そのために講習会や勉強会を開き、意見交換を行い全体の方向性の確認を行う。インターネットの講習会を開き、電話対応のみならずいつでも対応できるような環境を作る。

⑤新たにイベントを行い集客率をあげる

地域住民や観光客に触れる機会を増やすことで認知度を

あげ、好きになる、関心を持つきっかけづくりを行う。

篠栗セラピーロードで見られたような体験型のツアーを取り入れたイベントや町内外の人が久保谷森林セラピーロードで交流できるようなイベントを開催することで地域間に繋がりが生まれていき活気が溢れると考えている。

以上、私が提案する久保谷森林セラピーロードを核とした地域活性化事業の改善案である。

11. まつばら写真館

地域住民と繋がりを作り、多くの方に触れる機会を作る第一歩として2019年の11月にまろうど会会長・下元氏と高知工科大学学生企画で新たにイベントを行った。「まつばら写真館」である。(写真7)

まつばら写真館は2019年11月10日に紅葉祭りと同時開催を行った。テーマを決め、高知県内の方から写真を応募し、久保谷森林セラピーロード内の広場にて展示を行った。梶原町内外の22の方が応募してくださり、作品は全てで40作品集まった。(写真8)(写真9)

企画・広報・当日の運営を学生が行い、当日のセラピーロードのガイドをまろうど会が行った。今回の企画は年代・性別を問わず多くの方に知る機会を設けるため今までなかったネットでの広報を学生主体で行った。今回は写真館ということで写真好きに目が留まるようInstagramとホームページで広報活動を行った。従来の町内放送、新聞への記事投稿も行い、5月に行われたセラピー祭りや10月に高知市内で行われた梶原町のお知らせイベントの際にチラシを配布した。

少しばかりではあるが景品を用意し、梶原や松原の名産を知ってもらうことも目的の一つだ。当日セラピーロードを散策した方に投票を行ってもらい、賞を決める。地域住民に積極的に声をかけたところ、当日は多くの方に参加していただくことができた。また、賞の景品は無償で提供してくれ、梶原町の中心部にあるゆすはら雲の上図書館に1か月

間限定展示を行うなど徐々ではあるが繋がりが生まれていることが伺えた。



(写真7 下元氏による看板)



(写真8 広場にて展示)



(写真9 応募した作品)

12. 本研究のまとめ

本研究をまとめると、以下の通りとなる。

現在、久保谷森林セラピーロードが抱える問題点として、

- ・観光客数を正確に把握できていない
- ・人手不足・後継者不足
- ・観光客に関する情報不足・広報手段の閉鎖性
- ・梶原町役場との連携の欠如

その解決策として、

- ・セラピーロードに関する今後の方向性の確定
- ・独自の資格に変更し、気軽に案内人になれるように促す
- ・セラピーロードの維持管理に関する跡継ぎの育成
- ・定期的に講習会を開く
- ・新たにイベントを行い集客率をあげる

高知県梶原町松原地区では久保谷森林セラピーロードを核とした地域活性化事業を行っている。セラピーロードを利用して、地域活性化を持続的に行うには地域住民の繋がりと、行政との繋がりが重要である。地域に長期的な利益を生むために「人」「情報」「金」「産業」の状況について正確に判断し、今後の方向性について定め、統一した観光戦略が必要である。また、行政や教育機関に協力を仰ぎ、森林療法や森林セラピーについての理解を深め、地域の若者に高齢化を理由に行えていないことを補ってもらおう。持続的に活動を行うためには、組織の自立が必要である。

13. 引用・参考文献・協力者

【1】 地域百貨(最終閲覧日：2019/11/25)

<https://chiikihyaku.jp/>

【2】 認定の森(最終閲覧日：2019/12/1)

<https://www.fo-society.jp/quarter/>

【3】 中山間地域における移住者と受け入れの地域住民の

ニーズについて～高知県・梶原町をモデルとして～

(最終閲覧日：2019/12/1)

[\[tech.ac.jp/library/ron/pdf/2017/03/14/a1180490.pdf\]\(https://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2017/03/14/a1180490.pdf\)](https://www.kochi-</p></div><div data-bbox=)

【4】 Map-It (最終閲覧日：2019/11/26)

<https://map-it.azurewebsites.net>

【5】 雲の上の町ゆすはら(最終閲覧日：2019/11/27)

<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/>

【6】 篠栗町役場提供「森林セラピーロード基地 篠栗」

【7】 篠栗町 産業観光課 合屋氏

【8】 森の案内人 柿木氏

【9】 まろうど会会長 下元氏